

事業番号	15 04 12	事業改善シート(27年度実施事業分)		<input type="checkbox"/> 予算要求	<input type="checkbox"/> 当初予算案	<input type="checkbox"/> 補正予算案	<input checked="" type="checkbox"/> 点検
事業名	交流教育推進事業費			担当課	部局	教育委員会事務局	
総合5か年計画	プロジェクト			課・室	特別支援教育課		
	施策の総合的展開	7-1 子ども一人ひとりの個性や能力を伸ばす学校教育の充実		E-mail	tokubetsu-shien@pref.nagano.lg.jp		
		5 すべての子どもの学びを保障する支援		実施期間	S54 ~		

1 事業の概要

目指す姿	特別支援学校の児童生徒と幼・小・中等高等学校等の児童生徒とが活動を共にし、「仲間意識を育む」「経験を広げる」等により、社会性や豊かな人間性を育むことを目指す。						
現状(予算編成時)	<ul style="list-style-type: none"> 「共生社会」の実現にむけて、インクルーシブ教育システムの構築が社会的課題となっている。 「交流及び共同学習」の推進は、障がいのある子どもと障がいのない子ども双方が理解し合う教育の場としてその重要性が高まっている。 交流の際の移動手段の確保に苦慮している状況がある。 						
県が関与する理由	県関与の必要性あり	【左記の説明、根拠法令等】 幼稚園教育要領、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領 特別支援学校学習指導要領					
成果目標・事業内容	① 成果目標(H27)						
	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校の児童生徒と幼小中等高等学校等の交流を行い共生社会の実現につなげる。 交流の目標総数 延べ回数1,950回 						
	② 事業内容 (単位:千円)						
		項目	実施方法	H27事業実績	H27 (当初)	H27 (決算)	H28 (当初)
		交流教育提携校との交流	直接	活動例)同学年児童との遠足、文化祭への参加、調理活動、スキー教室、レクリエーション等	1,359	987	1,299
	提携校以外の相手先との交流	直接	・地域の諸団体との交流(季節行事等) ・居住地校交流(七夕会、お月見踊り、焼き芋、地域のお祭り等)				
	地域ボランティアの活用	直接	・地域ボランティアの活用により、交流提携校との交流及び共同学習の充実を図る(1校当たり9人のボランティア)。	49	2	24	
			合計	1,408	989	1,323	

事業コスト	区分(単位:千円)	25年度	26年度	27年度	28年度
	前年度繰越				
	当初予算	1,633	1,411	1,408	1,323
	補正予算				
	合計(A)	1,633	1,411	1,408	1,323
	一般財源	1,633	1,411	1,408	1,323
	県債				
	国庫支出金				
	その他				
	決算額(B)	1,092	1,057	989	
概算職員数(人)	0.10	0.10	0.10	0.10	
概算人件費	826	826	828	828	
概算事業費(B(A)+C)	1,918	1,883	1,817	2,151	

成果目標の達成状況					
項目	H26末(実績)	H27			H28 目標
		目標	成果	達成状況	
交流及び共同学習の延べ回数	1907	1950	1996	達成	2000

目標に対する成果の状況	提携校や地域との交流は年度当初に計画し、実施することから、例年の実施回数と大きく変わっていないが、居住地交流は移動や実施が個別に行えること、また特別支援学校の仲間と一緒に行動する機会をとおして、交流活動に慣れた児童生徒が居住地校との交流に移行していることから、回数が増加し、全体の交流回数の増加につながったと考えられる。居住地校の交流内容を見ると、学校行事以外にも学級活動への参加も目立っている。
-------------	--

2 今後の事業の方向性

今後、事業をどのようにしていきたいか	<input type="checkbox"/> 事業を実施しない <input type="checkbox"/> 事業を見直して実施 <input checked="" type="checkbox"/> 事業を現行どおり実施
	提携校や地域との交流は、特別支援学校の児童生徒にとって、慣れている集団と一緒に活動することで、交流活動に見通しが持ちやすく、また安心して、社会と関わることができる機会である。また、交流提携校の児童生徒が構えずに自然な姿でかかわっている姿を見ることができる。今後も障がいのある子どもと障がいのない子どもが交流し、相互に理解し合う場の増加に努めていく。